

うつせみ

樋口一葉

青空文庫

家の間敷は三疊敷の玄関までを入れて五間、手狭なれども北南吹とほしの風入りよく、庭は広々として植込の木立も茂ければ、夏の住居にうつてつけと見えて、場処も小石川の植物園にちかく物静なれば、少しの不便を疵にして他には申旨のなき貸家ありけり、門の柱に札をはりしより大凡三月ごしにも成けれど、いまだに住人のさだまらで、主なき門の柳のいと、空しくなびくも淋しかりき、家は何処までも奇麗にて見こみの好ければ、日のうちには二人三人の拝見をとて来るものも無きにはあらねど、敷金三月分、家賃は三十日限りの取たてにて七円五十銭といふに、それは下町の相場とて折かへして来るは無かりき、さるほどにこのほどの朝まだき四十に近かるべき年輩の男、紡績織の浴衣も少し色のさめたるを着て、至極そそくさと落つきの無きが差配のもとに來たりてこの家の見たしといふ、案内して其処此処と戸棚の数などを見せてあるくに、それ等のことは片耳にも入れて、唯四辺の静にさわやかなるを喜び、今日より直にお借り申まする、敷金は唯今置いて参りまして、引越しはこの夕暮、いかにも急速では御座りますが直様掃除にかかり

たう御座りますとて、何の子細なく約束はとどのひぬ、お職業はと問へば、いゑ別段これといふ物も御座りませぬとて至極曖昧あいまいの答へなり、御人数ごにんずはと聞かれて、その何だか四五人の事も御座りますし、七八人にも成りますし、始終とほしごたごたして埒らちは御座りませぬといふ、妙な事のお思ひしが掃除のすみで日暮れがたに引移り来たりしは、相乗りの幌ぼろかけ車に姿をつつみて、開きたる門を真直に入りて玄関におろしければ、主ぬしは男とも女とも人には見えじと思ひしげなれど、乗りゐたるは三十ばかりの氣の利ききし女中風と、今一人は十八か、九には未だいまと思はるやうの病美人びやうびじん、顔にも手足にも血の氣といふもの少しもなく、透きとほるやうに蒼あをしろ白しろきがいたましく見えて、折から世話やきに來てゐたりし、差配が心に、此人これを先刻さきのそそくさ男が妻とも妹いもとも受とられぬと思ひぬ。

荷物といふは大八だいはちに唯一ただくるま来たりしばかり、両隣にお定めにんずの土産は配りけれども、家の内は引越らしき騒さわぎもなく至極ふとつうひつそりとせし物なり。人数にんずはかのそそくさにこの女中と、他には御飯たきらしき肥大女ふとつうおよび、その夜に入りてより車を飛ばせて二人ほど来たりし人あり、一人は六十に近かるべき人品まるまげよき剃髮ていはつの老人、一人は妻なるべしつひ対するほどの年輩としばいにてこれは実法まるまげに小さき丸鬚まるまげをぞ結ひける、病みたる人は来るよりやがて奥深おくふかに床を敷かせて、括くくり枕つむりに頭を落つかせけるが、夜もすがら枕まくら近くにありて悄しよんぼり然

とせし老人二人の面やう、何処やら寝顔に似た処のあるやうなるは、この娘のもしも父母にては無きか、かのそそくさ男を始めとして女中ども一同旦那さま御新造様と言へば、応々^{おいおい}と返事して、男の名をば太吉^{たきち}と呼びて使ひぬ。

あくる朝風すずしきほどに今一人車を乗りつけける人の有けり、紬^{つむぎ}の単衣^{ひとへ}に白ちりめん^{つむぎ}の帯を巻きて、鼻の下に薄ら髯^{ひげ}のある三十位^{ふとり}のでつぷりと太て見だてよき人、小さき紙に川村太吉と書て張りたるを読みて此処だ此処だと車よりおりける、姿を見つけて、おお番町の旦那様とお三どんが真先に櫂^{たすき}をはづせば、そそくさは飛出していやお早いお出、よく早速おわかりに成りましたな、昨日^{きのふ}まで大塚^{おほつか}にお置き申したので御座りますが何分最早^{もつ}その何だか頻^{しきり}に嫌^{いや}にお成りなされて何処^{どこ}へか行かう行かうと仰しやる、仕方が御座りませぬで漸^{やつ}とまあ此処をば見つけ出して御座ります、御覧下さりませ一寸^{ちよいと}こうお庭も広^{ひろ}う御座りますし、四隣^{まはり}が遠うござりますので御気分^{ごしんぞさま}の為にも良からうかと存じます、はい昨夜^{ゆふべ}はよくお眠^{やすみ}に成ましたが今朝^{あした}ほどは又少しその、一寸御様子^{ごしんぞさま}が変つたやうで、ま、いらしつて御覧下さりませと先に立て案内をすれば、心配らしく髭^{ひげ}をひねりて奥の座敷に通^{とほ}りぬ。

二

気分すぐれて良き時は三歳児のやうに父母の膝に眠るか、白紙を切つて姉様の製造に余念なく、物を問へばにこにこと打笑みて唯はいはいと意味もなき返事をする温順しさも、狂風一陣梢をうごかして来る氣の立つた折には、父様も母様も兄様も誰れも後生顔を見せて下さるな、とて物陰にひそんで泣く、声は腸を絞り出すやうにて私が悪う御座りました、堪忍して堪忍してと繰返し繰返し、さながら目の前の何やらに向つて詫るやうに言ふかと思へば、今行まする、今行まする、私もお跡から参りまするとて日のうちには看護の暇をうかがひて駆け出すこと二度三度もあり、井戸には蓋を置き、きれ物としては鋏刀一挺目にかからぬやうとの心配りも、危きは病ひのさする業かも、この繊弱き娘一人とり止むる事かなはで、勢ひに乗りて駆け出す時には大の男二人がかりにてもむつかしき時の有ける。

本宅は三番町の何処やらにて表札を見ればむむあの人の家かと合点のゆくほどの身分、今さら此処には言はずもがな、名前の恥かしければ病院へ入れる事もせて、医者も心安きを招き家は僕の太吉といふが名を借りて心まかせの養生、一月と同じ処に住へば見る物残

らず嫌やに成りて、次第に病ひのつゝの事見る目も恐ろしきほど懐まじき事あり。

当主は養子にて此娘こそは家につきての一粒ものなれば父母が歎きおもひやるべし、病ひにふしたるは桜さく春の頃よりと聞くに、それよりの昼夜を合する間もなき心配に疲れて、老たる人はよろよろたよたと二人ながら力なきさうの風情、娘が病ひの俄かに起りて私はもう帰りませぬとて駆け出すを見る折にも、あれあれどうかしてくれ、太吉太吉と呼立てるほかには何の能なく情なき体なり。

昨夜は夜もすがら静に眠りて、今朝は誰れより一はな懸けに目を覚し、顔を洗ひ髪を撫でつけて着物もみづから気に入りしを取出し、友仙の帯に緋ぢりめんの帯あげも人手を借ずに手ばしこく締めたる姿、不図見たる目にはこの様の病人とも思ひ寄るまじき美しく、両親は見返りて今更に涕ぐみぬ、附そひの女が粥の膳を持来たりて召上りますかと問へば、嫌や嫌やと頭をふりて意気地もなく母の膝へ寄そひしが、今日は私の年季が明るするか、帰る事が出来るで御座んせうかとて問ひかけるに、年季が明るといつて何処へ帰る了簡、此処はお前さんの家では無いか、このほかに行くところも無からうでは無いか、分らぬ事を言ふ物ではありませぬと叱られて、それでも母様私は何処へか行くので御座りませう、あれ彼方に迎ひの車が来てゐます、とて指さすを見れば軒端のもちの木に大い

なる蛛くもの巢くものかかりて、朝日にかがやきて金色の光ある物なりける。

母は情なき思ひの胸に迫り来て、あれあんな事を、貴君あなたお聞遊きこしましたかと良人をに向ひて忌いまはし氣まにいひける、娘は俄しほに萎しほれかへりし面おもてに生々おもてとせし色を見せて、あのそれ一昨を年としのお花見の時ねと言いひ出す、何いふと受けて聞きければ学校の庭は奇麗いでしたねへとて面おもてしろさうに笑ふ、あの時貴君あなたが下すつた花をね、私は今も本の間へ入れてあります、奇麗な花でしたけれどももう萎しほれてしまひました、貴君にはあれから以来御目ごめにかからぬでは御座ごんせぬか、何故なぜ逢あひに来て下さらないの、何故帰かへつて来て下さらぬの、もうお目ごめにかか
る事は一生出来ぬので御座ごんするか、それは私が悪わるう御座ごりました、私が悪いに相違ごござ
んせぬけれど、それは兄様にいさまが、兄が、ああ誰たれれにも済すませぬ、私が悪わるう御座ごりました免ゆるし
て免ゆるしてと胸を抱かかいて苦しさうに身を悶もゆれば、雪子ゆきこや何も余計よな事を考かんへては成なりませ
ぬよ、それがお前の病氣びやうきなのだから、学校も花もありはしない、兄様にいさまも此こ処ところにお出ででな
さつてはゐないのに、何か見えるやうに思おもふのが病氣びやうきなのだから氣きを落おつけて旧もとの雪子ゆきこ
んに成なておくれ、よ、よ、氣きが付つきましたかへと脊せを撫なでられて、母の膝ひざの上にすすり泣な
きの声こゑひくく聞きえぬ。

番町の旦那様お出と聞くより雪や兄様がお見舞に来て下されたと言へど、顔を横にして振向ふともせぬ無礼を、常ならば怒りもすべき事なれど、ああ、捨てて置いて下さい、気に逆らつてもならぬからとて義母が手づから与へられし皮蒲団を貰ひて、枕もとを少し遠ざかり、吹く風を背にして柱の際に黙然としてある父に向ひ、静に一つ二つ詞を交へぬ。

番町の旦那といふは口数少なき人と見えて、時たま思ひ出したやうにはたはたと団扇づかひするか、巻煙草の灰を払つては又火をつけて手に持てある位なもの、絶えず尻目にかた雪子の方を眺めて困つたものですなと言ふばかり、ああこんな事と知りましたら早くに方法も有つたのでせうが今に成つては駟馬も及ばずです、植村も可愛想な事でした、とて下を向いて歎息の声を洩らすに、どうも何とも、我は悉皆世上の事に疎しな、母もあの通りの何であるので、三方四方埒も無い事に成つてな、第一は此娘の気が狭いからではあるが、否植村も気が狭いからで、どうもこんな事になつてしまつたで、我等二人が実に其方に合はせる顔も無いやうな仕義でな、然し雪をも可愛想と思つて遣つてくれ、こ

んな身に成つても其方そちらへの義理ばかり思つて情ない事を言ひ出しをる、多少教育も授けてあるに狂気するといふは如何いかにも恥かしい事で、この方から行くと家の恥辱にも成る實に憎むべき奴ではあるが、情実を汲くんでな、これほどまで操みさをといふものを取止めて置いただけ憐あはれんで遣つてくれ、愚鈍ではあるが子供の時からこれといふ不出来ふでかでも無かつたを思ふと何か残念の様なもあつて、誠の親馬鹿といふので有らうが平癒なほらぬほどならば死ねとまでも諦あきらめがつきかねる物で、余り昨今忌はしい事を言はれると死期しごが近よつたかと取越し苦労をやつてな、大塚の家には何か迎むかひに来る物が有るなどと騒さわぎをやるにつけて母がつまらぬ易者などにでも見て貰つたか、愚ぐな話しではあるが一月のうちに生命せいめいが危ふいとか言つたさうな、聞いて見ると余り心よくも無いに当人も頻しきりと嫌がる様子なり、ま、引移りをするが宜からうとて此処を探させては来たが、いやどうも永持はあるまいと思はれる、殆ほとんど毎日死ぬ死ぬと言って見る通り人間らしい色艶いろつやもなし、食事も丁度一週間ばかり一粒りつぶも口へ入れる事が無いに、そればかりでも身体からだの疲労が甚しからうと思はれるので種々いろいろに異見も言ふが、どうも病せいひの故であらうかとかくに誰れの言ふ事も用ひぬには困りはてる、医者は例の安田が来るのでかう素しろうと人まかせでは我ままばかりつので宜く有るまいと思はれる、我わしの病院へ入れる事は不承知かと毎々聞かれるのであるが、それもどう有らうか

と母などは頻しきりにいやがるので我も二の足を踏ふんでゐる、無論病院へ行けば自宅と違つて窮屈ではあらうが、何分この頃飛出しが始まつて、我わしなどは勿もちろん論太吉と倉くらと二人ぐらゐの力では到底引とめられぬ働きをやるからの、万一井戸へでも懸られてはと思つて、無論蓋はして有るが往わうらい来へ飛出されても難義至極なり、それ等を思ふと入院させやうとも思ふが何か不憚ふびんらしくて心一つには定めかねるて、其方そちらに思ひ寄よりも有あらば言つて見てくれとてくるくると剃そりたる頭つむりを撫なでて思案に能あたはぬ風情、はあはあと聞きる人も詞は無くもろとて諸もろと共に溜ためい息いきなり。

娘は先刻さきの涙なみだに身を揉もみしかば、さらでもの疲れ甚しく、なよなよと母の膝へ寄添よそひしまま眠ねむれば、お倉お倉と呼んで附添よそひの女子をなこと共に郡内ぐんないの蒲団ふとんの上へ抱いだき上げて臥ふさするにはや正体も無く夢に入るやうなり、兄といへるは静いさに膝行いざり寄りてさしのぞくに、黒く多き髪かみの毛けを最惜いとをしげもなく引つめて、銀杏いとうがへ返しかへのこはれたるやうに折返し折返し鬚まげな形かたちに畳たたみこみたるが、大方横よこに成りて狼藉らうぜきの姿なれども、幽霊ゆうれいのやうに細く白しろき手を二つ重ねて枕まくらのもとに投なげ出いだし、浴衣ゆかたの胸少むねすくしあらはに成りて締ひめたる緋ひぢりめんの帯おビあげの解とけて帯おビより落おかかると婀なまめかしからで惨いたましなまめのさまなり。

枕まくらに近く一脚いっさくの机こゝろを据すゑたるは、折ひふし硯すずりすずり々すずりすずりと呼び、書物しよぶつよむとて有ありし学校のまね

びをなせば、心にまかせて紙いたづらせよとなり、兄といへるは何心なく積重ねたる反古紙がみを手に取りて見れば、怪しき書風に正体得えしれぬ文字を書ちらして、これが雪子の手跡かと情なきやうなる中に、鮮かに読まれたるは村といふ字、郎といふ字、ああ植村録郎、植村録郎、よむに得堪へずして無言にさし置きぬ。

四

今日是用なしの身なればとて兄は終日此処にありけり、氷を取寄せて雪子の頭つむりを冷す看護きそひの女子をんなに替りて、どれ少し我がやつて見やうと無骨らしく手を出すに、恐れ入ます、お召物が濡ぬれますと言ふを、いいさ先まづさせて見てくれろとて氷袋の口を開いて水を搾しぼり出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄にいさん様が頭つむりを冷して下さるのですよとて、母の親心つげ付れども何の事とも聞ききわけ分ぬと覚しく、目は見開きながら空くうを眺めて、あれ綺麗な蝶ちょうが蝶ちょうと言ひかけしが、殺してはいけませんよ、兄にいさん様兄様と声を限りに呼べば、こらどうした、蝶も何も居ない、兄は此処だから、殺しはせぬから安心して、な、宜いか、見えるか、ゑ、見えるか、兄だよ、正雄だよ、気を取直して正気になつて、お父とつさんやお母つか

さんを安心させてくれ、こら少し聞分てくれ、よ、お前がこの様な病気になつてから、お
 父様もお母様も一晩もゆるりとお眠に成つた事はない、お疲れなされてお痩せなされて
 介抱してゐて下さるのを孝行のお前に何故わからない、平常は道理がよく了解する人では無
 いか、気を静めて考へ直してくれ、植村の事は今更取かへされぬ事であるから、跡でも懇
 に吊つて遣れば、お前が手づから香花でも手向ければ、あれは快よく瞑する事が出来る
 遺書にも有つたと言ふでは無いか、あれは潔よくこの世を思ひ切つたので、お前の事も
 合せて思ひ切つたので決して未練は残してゐなかつたに、お前がこの様にと本心を取乱して
 御両親に歎をかけると言ふは解らぬでは無いか、あれに対してお前の処置の無情であつた
 もあれは決して恨んではゐなかつた、あれは道理を知つてゐる男であらう、な、さうであ
 らう、校内一流の人だとお前も常に褒めたではないか、その人であるから決してお前を恨
 んで死ぬ、そんな事はある筈がない、憤りは世間に対してなので、既に其事は人も知つて
 る事なり遺書によつて明かでは無いか、考へ直して正氣に成つて、その後の事はお前
 の心に任せるから思ふままの世を経るが宜い、御両親のある事を忘れないで、御両親がど
 れほどお歎きなさるか考へて、気を取直してくれ、彘、宜いか、お前が心で直さうと思
 へば今日の今も直れるでは無いか、医者にも及ばぬ、薬にも及ばぬ、心一つ居処をたしか

にしてな、直つてくれ、よ、よ、こら雪、宜いか、解つたかと言へば、唯うなづいて、はいと言ふ。

女をんなどもは何時いつしか枕もとを遠慮はづして四辺あたりには父と母と正雄のあるばかり、今いふ事は解るとも解らぬとも覚えねども兄にいさん様兄にいさん様と小さき声に呼べば、何か用かと氷袋を片寄せ傍近く寄るに、私を起して下され、何故か身体からだが痛くてと言ふ、それは何時も気の立つままに駆け出いだして大の男に捉とらへられるを、振はなすと恐ろしい力を出せば定めし身も痛からう生なまきず疵きずも処ところどころ々に有るを、それでも身体の痛い知れるほどならばとはかなき事をも両親ふたおやは頼もしがりぬ。

お前の抱かれてゐるは誰君どなた、知れるかへと母親の問へば、言下ごんかに兄にいさん様で御座りませうと言ふ、さうわかればもう子細はなし、今話して下された事覚えてかと言へば、知つてゐます、花は盛りにと又あらぬ事を言ひ出せば、一同かほを見合せて情なき思ひなり。

良やしばしありて雪子は息の下に極めて恥かしげの低き声して、もう後ごしやう生おほお願ひで御座りまする、その事は言ふて下さりますな、そのやうに仰せ下さりましたも私わたしにはお返事の致しやうが御座りませぬと言ひ出るに、何をと母が顔を出せば、あ、植村さん、植村さん、何処へお出遊いでばすのと岸破がはと起きて、不意に驚く正雄の膝ひざを突のけつつ椽えんの方へと駆け出いだ

すに、それとて一同ばらばらと勝手より太吉おくらなど飛来るほどにさのみも行かず椽先の柱のもとにびたりと坐して、堪かん忍にんして下され、私が悪う御座りました、始めから私が悪う御座りました、貴君あなたに悪い事は無い、私が、私が、申さないが悪う御座りました、兄と言ふてはをりまするけれど。むせび泣きの声聞え初めて断続その言葉その事とも聞わき難く、半かかげし軒すだればの簾すだれ、風に音する夕ぐれ淋し。

五

雪子が繰かへす言の葉は昨日も今日も一昨日をとしひも、三月の以前もその前も、更に異なる事ことをば言はざりき、唇に絶えぬは植村といふ名、ゆるし給たまへと言ふ言葉、学校といひ、手紙といひ、我罪、おあとから行まする、恋しき君ことば、さる詞ことばをば次第なく並べて、身は此処ここに心はもぬけのからに成りたれば、人の言へるは聞き分わるくよしも無く、樂しげに笑ふは無心の昔しを夢みてなるべく、胸いだを抱いだきて苦悶くもんするは遣るかた無かりし当時のさまの再うつつび現うつつにあらはるるなるべし。

おいたはしき事とは太吉も言ひぬ、お倉も言へり、心なきお三どんの末まで嬢さまに罪

ありとはいささかも言はざりき、黄八丈の袖そでの長き書生羽織めして、品のよき高髻たかまげにお根がけは桜色を重ねたる白の丈長たけなが、平打ひらうちの銀簪ぎんかん一つ淡泊あつさりと遊して学校がよひのお姿今も目に残りて、何時いつもと旧のやうに御平癒おなほりあそばすやらと心細し、植村さまも好いお方であつたものをとお倉の言へば、何があの色の黒い無骨らしきお方、学問はゑらからうともどうで此方うちのお嬢さまが対つひにはならぬ、根つから私は褒めませぬとお三の力めば、それはお前が知らぬからそんな憎くていな事も言へるものの、三日交際つきあひをしたら植村様のあと追ふて三途さんづの川まで行きたくならう、番町の若旦那を悪いと言ふではなけれど、彼方あなたとは質たちが違ふて言ふに言はれぬ好い方であつた、私でさへ植村様が何だと聞いた時にはお可かあい愛想せうな事をと涙がこぼれたもの、お嬢さまの身に成つては愁うれらからうでは無いか、私やお前のやうなおつと来いならば事は無いけれど、不断つしんでお出遊ばすだけ身にしみる事も深からう、あの親切な優しい方をかう言ふては悪いけれど若旦那さへ無かつたらお嬢さまも御病氣になるほどの心配は遊ばすまいに、さういへば植村様が無かつたら天下泰平に納まつたものを、ああ浮世は愁うれらいものだね、何事も明あけすけに言ふて除のける事が出来ぬからとて、お倉はつくづく儘ままならぬを傷いたみぬ。

つとめある身なれば正雄は日毎ひごとに訪とふ事もならず、三日おき、二日おきの夜な夜な車を

柳のもとに乗りすてぬ、雪子は喜んで迎へる時あり、泣いて辞す時あり、稚子のやうに成りて正雄の膝を枕にして寐る時あり、誰が給仕にても箸をば取らずと我儘をいへれど、正雄に叱られて同じ膳の上に粥の湯をすすする事もあり、癒つてくれるか。癒ります。今日癒つてくれ。今日癒ります、癒つて兄様のお袴を仕立て上げます、お召も縫ふて上げます。それは辱し早く癒つて縫ふてくれと言へば、さうしましたらば植村様を呼んで下さるか、植村様に逢はして下さるか、むむ逢はして遣る、呼んでも来る、はやく癒つて御両親に安心させてくれ、宜いかと言へば、ああ明日は癒りますと憚りもなく言ひけり。

正しく言ひしを心頼みに有るまじき事とは思へども明日は日暮も待たず車を飛ばせ来るに、容体ことごとく変りて何を言へども嫌々として人の顔をば見るを厭ひ、父母をも兄をも女子どもをも寄せつけず、知りませぬ、知りませぬ、私は何も知りませぬとて打泣くばかり、家の中をば広き野原と見て行く方なき歎きに人の袖をもしぼらせぬ。

俄かに暑氣つよく成し八月の中旬より狂乱いたく募りて人をも物をも見分ちがたく、泣く声は昼夜に絶えず、眠るといふ事ふつに無ければ落入たる眼に形相すさまじくこの世の人とも覚えず成ぬ、看護の人も疲れぬ、雪子の身も弱りぬ、きのふも植村に逢ひしと

言ひ、今日も植村に逢ひたりと言ふ、川一つ隔てて姿を見るばかり、霧の立おほふて臙おぼろ気なれども明日あしたは明日はと言ひて又そのほかに物いはず。

いづぞは正気に復りて夢のさめたる如く、父様母様といふ折の有りもやすと覚束おぼつかなくも一日二日と待たれぬ、空蟬うつせみはからを見つつもなぐさめつ、あはれ門かどなる柳に秋風のおと聞えずもがな。

青空文庫情報

底本：「こぼりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日116刷改版

2005（平成17）年5月20日126刷

初出：「讀賣新聞」

1895（明治28）年8月27日号～31日号

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

※送りがな、振りがな、漢字の使い方不統一は、底本通りです。

入力：岡村和彦

校正：青米

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

うつせみ

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>